伊藤光中の注記・説を有する『とりかへばや』伝本考

――國學院大學本と神宮文庫本について――

新居和美

はじめに

現在、百本以上の伝存が知られる『とりかへばや』諸本中、伊藤光中[1]が直接関わった写本は二本存在する。それは静嘉堂文庫四冊十行[2]本（松井文庫本D）（以下、静嘉堂本と称す）と東海大学付属図書館蔵桃園文庫[3]本（以下、桃園本と称す）である。このうち桃園本は、頭書や傍書として注記があるだけでなく、系図・年立などを纏めた別冊が存在し、総合的な注釈本たる体裁を有している。別冊序文には、

十年はかり／さきつかたよりこれかれあまたの本ともかうかへあはせつゝあまれる／をけつり脱たるをおきなひなとからうして今は大かたにはよみ心得／らるへくなりにたれはうひまなひの人のために引哥や何やと傍に／頭にかきくはへ系圖年立なとをさへに作りそへておのれにつきて／物まなふ人又さらぬよそ人たちにも見すへきさまになしをへ／つるは天保四年といふとしのふつきたなはたまつるまへの日

つたのやのあるし　藤原光中

（／は改行をしめす。傍線は稿者。以下同じ）

とあり、傍線部から天保四年（一八三三）に桃園本を完成させたこと、十年ほど前から多数の写本を用いて校合作業を行っていたことが知られる。さらに、もう一本、静嘉堂本の奥書には、

文政八年酉八月以両本校加僻案了　絡石舎主人（以上、朱）
同十年亥九月以異本對校且以泊洒舎翁藏本異同注了
一本奥書雅望自筆本
登利加邊婆也四巻借橘千蔭藏本而謄寫之
寛政十二年庚申正月　石川雅望（以上、墨）
文政十二己丑年二月以森嘉基校本對校畢
森本奥書
右とりかへはやの物語四巻は蓬莱氏の本をかりて写しとり校合もをへぬ
天明五年乙巳正月十日　本居宣長
右鈴屋大人の御本もてうつしぬ　加藤磯足
文政三年十二月校合畢傍注もいさゝか書加ふ　酔月園嘉基
文政四年正月廿日校合をへぬ　千無羅仲雄
かくあれと校合書入は嘉基自筆と見ゆ
文政十二己丑年十月以児玉氏校本伊勢貞代氏門人比校了（以上、朱）

と詳細な記載があり、文政八年（一八二五）から同十二年（一八二九）までの五年間に四度の校合を行っていることが知られる。併せ見ると、静嘉堂本の校合期間は桃園本序文の「十年はかりさきつかた」という時期とほぼ一致することがわかる。つまり、光中は静嘉堂本に複数の写本によって本文異同や注を書き写し、それを基にして桃園本を作成したと考えられる。今まで最初の注釈書として知られていた岡本保孝の『とりかへばや物語考証』は安政五年（一八五三）の成立であるから、光中はそれより二十五年も前に注釈書を纏めていたことになる。『とりかへばや』研究史において、現存する最古の注釈書を完成させた伊藤光中の存在は注目に値しよう。

本稿では、光中が直接関係した写本ではなく、光中の注や説を受け継いでいる写本に注目し、光中注記・説の享受の様相を現時点でわかる限り報告したい。

一　光中注を有する写本 ―國學院大學本―

光中の注記を有する写本は、現在、國學院大學図書館に所蔵される。國學院大學図書館蔵四冊本[4]（以下、國學院本と称す）は、巻一から巻四の全冊に渡り計四十の頭注が存在する。その中には、

光中按思し給へてなんとありしを誤れるなるへし（巻三　一七オ）

（ゴシック体は朱を表す。以下、引用部分同じ）

のように「光中」名の注記が複数見られるのである。また、巻一の頭注には、

□君元服して髪あけ
□ひし顔のイ

（國學院本巻一　一一オ）

（□は写本上部が裁断されているため判読不能の箇所）

と イ本の異文が注記される。このイ本本文は静嘉堂本巻一の本文、右大臣殿ぞし給ふ。若君元服して髪あげ給ひし顔の。御あげまさりのうつくしさ（イ本ナシ　文ハ二森　服ハ二森　森）

（静嘉堂本巻一　九オ）（網掛けは稿者）

と一致する。しかし、この網掛け部分の本文は、静嘉堂本頭注に、

光中按
イ本若君云々なきかたまされるに似たり本文としてはうたなきつゝきなり恐らくは傍に注し置たるをこゝろえぬものゝ本行に字入たるならん（ママ）

（静嘉堂本巻一　九オ）

と注記される通り、本文としてはかなり不自然である。注記の如く、おそらくは本来傍注に記されていたはずのものが本文に入ってしまったと思しい。それは浚明本系統の写本を見れば一目瞭然で、仮に、浚明本系統の一本、内閣文庫本の該当箇所をあげると、

若君元服して髪あげ給ひし顔のいとをかしくうつくしさ他

右大臣ぞし給ふ。御あげまさりのうつくしさかねてみきこえしことなれど～

（『浚明本とりかへばや』[5]一五頁）

とあり、同じく「若君元服して髪あげ給ひし顔の」云々と傍注があることによっても推測される。つまり、本来浚明本系統の傍注であ

ったものが本文に流れ込んだ状態の写本を國學院本は校合に用いたということになる。また、すでに挙げたように光中注記があることや國學院本の注記の多くが静嘉堂本の注記と一致することから、國學院本は静嘉堂本、または静嘉堂本を書写した写本を用いて注記を施したことが窺える。しかし、現在の國學院本は筆跡や行数などが各巻によって異なる取り合わせ本となっている。注記を見ても複数の筆跡で墨・朱・茶などの注記が存在したり、巻一・三・四に比べ巻二の頭注が極端に少ないなど複雑な様相を呈している。つまり、どの部分が静嘉堂本から書写された注記なのか、その注記がいつの段階で書き写されたのかなどその経緯がわかりにくくなっているのである。そこで、奥書や形態を検討しつつ、それらを明らかにしていきたい。

まず國學院本各巻の形態を示す。

【巻一】縦二六・八㎝、横一八・八㎝。表紙黄土色、紙表紙（後装）。一面九行。上欄四・七㎝。光中注記が存在する。注記の上部分が欠けているものがある。

【巻二】縦二六・八㎝、横一八・八㎝。表紙黄土色、紙表紙（後装）。一面一一行。上欄二・五㎝。注記一例のみ。

【巻三】縦二六・八㎝、横一八・八㎝。表紙黄土色、紙表紙（後装）。一面十行。上欄五・五㎝。光中注記が存在する。

【巻四】縦二六・八㎝、横一八・八㎝。表紙黄土色、紙表紙（後装）。一面九行。上欄四・七㎝。光中注記が存在する。注記の上部分が欠けているものがある。

巻一・四は一面の行数、上欄の幅が同じであるため同時期の写本と判断できる。しかし、巻二と巻三はそれぞれ行数および上欄の幅、また筆跡も異なるため同時期の写本とは考えにくい。寸法や表紙の装丁は四冊同じであるため、それぞれ書写時期の異なる写本をいつかの段階で取り合わせ装丁し直したものと考えられる。では次に國學院本の奥書をあげる。

登利加邊婆也四巻借橘千蔭
蔵本而謄寫之
寛政十三年庚申正月
石川雅望

文政七年申九月一校了■
同八年得一本校朱

（網掛け部分の「石川雅望」は墨で塗りつぶされているが、下に透けて名前が見える。■部分は墨で濃く塗りつぶされており、下の文字は判読不能。）

奥書五行目に「文政七年申九月一校了」とあることから文政七年九月に書写の確認作業が行われたことがわかる。よって、おそらく文政七年九月直前に奥書一行目「登利加邊婆～石川雅望」までの奥書がある写本によって國學院本が書写されただろうことが想像され

る。また奥書六行目の「同八年得一本校」とあることから、文政八年に校合が行われ、最後の「朱」部分と光中注の朱が同色であることから、この時の校合本が静嘉堂本、或いは静嘉堂本を書写した本である可能性が高い。[6] さて、これらの経緯を図式化すると次のようになる。

《國學院本の流れ》

↑文政七年(1824)九月直前か。
「～石川雅望」までの奥書のある写本を用いて書写。

↑文政七年(1824)九月
書写の確認作業を行う。

↑文政八年(1825)
静嘉堂本、或いは静嘉堂本を書写した本を用いて校合（光中注記入る）。
巻1　2　3　4　↓巻3はすでに補われた本。

↑　?年　巻1　2　3　4　↓巻2も補われた本となる。

↑　?年　巻1　2　3　4　↓巻2に合わせ裁断、再装丁。

↑　?年　墨・濃赤・茶色の注記が入る。

奥書の流れは上記のように推測される。では、図の文政八年以後の流れに注目していく。まず各巻の注記において巻一・三・四に静嘉堂本と同内容の注記があることから、それらがない巻二は文政八年以後にとりあわせられただろうと推測される。さらに巻一・三・四に静嘉堂本と同内容の注記があるものの、巻三のみその注記がぎりぎりで切れていないということから、文政八年の段階で巻三は巻一・四より小さい寸法であったことが推測される。よって巻三は文政八年の段階ですでに取り合わせられた巻だろうということがわかる。そして裁断・再装丁された時に、巻一と巻四の静嘉堂本注記は上部分が裁断され、巻三部分はぎりぎりでそのまま残り、その後に書き込まれたと思しい墨や濃い赤・茶色の注記は切れずに四冊全体にわたって残っていると考えられる。つまり、國學院本には、文政八年時に静嘉堂本が有していた注記が巻一・三・四に存在していると言えるのである。

二　國學院本書写者の注釈態度

次に、國學院本書写者の注釈態度を考えてみたい。但し、文政八年の注記と、その後に書き入れられたと思しい上部分が切れていない墨・茶色・濃い赤の注記は筆跡が異なるため、別人が付したと考えられるので、文政八年までの注記と考えられるものを対象として考察する。文政八年までの注記と思しいものは全注記四十例中二十一例にのぼる。二十一例の注記はほぼ静嘉堂本と同内容の注記にな

るが、それらが完全に一致するわけではない。例をあげてみよう。

國學院本	静嘉堂本
□うめこんしやう	ようめこんしやう
□中按容面根性にや	光中按容面根性にや
（巻一　五九ウ）	うつほ祭使三十一ウ
（□は写本の上部欠で判読不能箇所）	ようめいさえはありかたしやなと手習十三ウいときやうさくなりける人の御ようめいかな濱松三卅七ウ此比もそ京の中にようめいけしうはあらぬ人々堤中納言　（巻一　四五ウ）

國學院本では「容面根性にや」までの注記だが、静嘉堂本にはそれ以後も用例をあげて注記が続く。続いて、

國學院本	静嘉堂本
□今	古今
□心なくさめかねつ	我心なくさめかねつさらしなやおはすて山にてる月を見て
（巻四　六四ウ）	（巻四　五三ウ）

引歌の注記においても國學院本は二句目まで記されているが、静嘉堂本では一首全てが明記される。國學院本はどちらも静嘉堂本の朱で書かれた部分しか注記を有していない。また、

國學院本	静嘉堂本
□氏夕霧　（巻一　五オ）	十五日つゝうらやみなく四稿ウ源氏夕霧うつほ楼上　下ノ一廿四オ左のおとゝは宮おほい殿いとうるはしくこそ十五夜つゝおはしつゝこゝもいづれともなく思ひかしつき給へ云々源氏匂宮四丁ウうしとらのまちにかの一条の宮をわたし奉らせ給ひてなん三条とのと夜ことに十五日つゝうるはしうかよひすみ給ひける　（巻一　四オ）

「□氏夕霧」としか注記がない國學院本に比して静嘉堂本には「源氏夕霧」の上に見せ消ちがなされ用例が続いている。これは見せ消ちが施される以前「源氏夕霧」としかなかった状態の写本を用いて國學院本書写者が注記を写し、その後、静嘉堂本では、見せ消ちがなされ注記の続きが書かれたのだと推定される。つまり、すでに引

用した注記からもわかるように、國學院本は諸本校合の途中段階である静嘉堂本或いはその書写本を用いて校合し、注記を施したのである。その校合が文政八年九月に行われたと考えると、静嘉堂本奥書から知られる一度目の校合の直後にあたる。静嘉堂本の注記がどの段階で書き入れられたかは一部を除いて判明しなかったのだが、國學院本が所持している注記部分は文政八年九月までには書き入られていたということが判明する。

さて、國學院本は校合途中段階の静嘉堂本、或いはその書写本を用いて校合を行ったことがわかるが、書写者は注記をそのまま書写してはいない。例えば、

國學院本	静嘉堂本
光中按思し給へてなんとありしを誤れるなるへし（巻三　一七オ）	光中按思し給へてなんとありし[illegible]誤しなるへし（巻三　一八オ）

静嘉堂本で「てをくと」とある部分を國學院本では省略している。さらに次の「おほさう」の語釈では

□ほさう	おほさう　初稿オ
□中按此詞物語におほいまたよく	光中按此詞物語におほく[illegible]といまたよくあたれる[illegible]さうはさまの音便に崩れたるにて大さまの意なるへし猶別にくはしき考あり（巻四　一六オ）
□たれる[illegible]	
□うはさまの音便に	
□れたる詞にて大	
□まの意なるへし（巻四　二十ウ）	

「見えたれ」を「あれ」に、「注なし」を「注解を見す」にするなど注記内の言葉遣いの差異が見られる。また、注記を示す時の色についても区別が見られ、静嘉堂本と國學院本の注記の色は一致しない。静嘉堂本では書写年次に応じて色の区別が用いられているが、國學院本では、同じ文政八年時の注記でも墨と朱の区別がつけられている。区別は次のようになる。

《朱で書かれたもの》

★異文→朱

□君元服して髪あけ

□ひし顔のイ　（巻一　一一オ）

★引歌→朱

□いたみ岩うつなみの　（巻一　三七オ）

★典拠→朱

□桒　（巻一　三六オ）〔「催馬楽」とあって上部分が切られたか〕

★本文の疑い→朱

光中按思し給へてなんとありしを誤れるなるへし（巻三　一七オ）

《墨で書かれたもの》

★語釈↓墨

□ほさう

□中按此詞物語におほ

□あれといまたよく

□たれる注解を見す

□うはさまの音便に

□れたる詞にて大

□まの意なるへし　（巻四　二十ウ）

□うめこんしやう

□中按容面根性にや　（巻一　五九ウ）

朱で書かれるものとしては異文注記、引歌、典拠、さらに本文に誤りがあると考えそれを記す注記も朱で書かれている。一方、墨で書かれているものは「おほぞう」「ようめこんしやう」のように語釈に限られる。つまり、國學院本書写者は、ただ漫然と注記を写しているのではなく、己の基準に基づいて工夫をこらしていると言えよう。

三　光中説を有する写本 ―神宮文庫本―

続いて、光中説を有する写本として、神宮文庫本に注目したい。まず同本の奥書をあげる。[7]

右このふみは本居三四右衛門かもとよりおこせしなり

享和三年夏　山田六郎高村書（以上墨黒）

十一月九日之日よみをへつ　松琴（以上朱書）

奥書一・二行目から、本居三四右衛門[8]（本居太平）から送られてきた本を享和三年（一八〇三）に山田六郎高村[9]が手にいれたこと、続いて三行目から、享和三年十一月に松琴[10]なる人物が読み終えたことがわかる。これら奥書は本文とは別筆で記されている。よって奥書に見られる人物は本文の書写者とは別人であるが、本文頭に施された語釈などの注記と字体が似通っていることから山田六郎高村か松琴が注記を施した可能性が考えられる。さて、肝心の光中説は巻一の前見返し部分に存在する。

宣昭云安藤為章ノ年山紀聞二云按するにとりかへはやハ源氏狭衣なとより後に作れる草子と見ゆ／宣耀殿（賓ハ男也）権中納言（賓ハ女也）兄妹をとりかへて作れりトイヘリ四ノ巻ニなにかしの大将の笛のねに／めてゝおりくたりけん天つをとめもみゝとめつへかめるにトアル大将ハ狭衣大将ヲイヘルナルヘケレハモトヨリ／狭衣已後ノ草子ナルコト論ナシ　マタ上野沼田伊藤光中（号十郎）説ニハコノ物語ノ哥風葉集ニミエタレハ狭衣ヨリハ後風葉ヨリハ前ノモノ也ト云リ

「宣昭云～」として『とりかへばや』成立年代に関する注記が記され、その後光中の説が記されている。しかし、光中説の直前に二文

字程度の空白があることから「宣昭云〜」の内容は光中説の直前の『年山紀聞』の記事までと考えられ、「宣昭」[1]が光中説を知っていたとは考えにくい。さらにこの見返し部分の記載は、本文・奥書とは別人の筆であると見受けられ、宣昭・山田六郎高村・松琴以外の第三者が記したであろうことが窺える。この第三者が判明しない以上、書き入れられた年次や経緯など神宮文庫本と光中との関連をこれ以上探るのは困難といえるが、当時、光中の説が知られていたということが証明できる貴重な写本であるといえる。

おわりに

以上、伊藤光中の注記・説を有する写本として國學院大學本・神宮文庫本の二本を紹介した。残念ながら両写本とも光中との関わりが窺える人物の特定にはいたらなかったが、当時、光中の注記が書写されていたということは判明した。特に國學院本が校合に静嘉堂本を用いた際、本文だけでなく光中注記をも書写していること、神宮文庫本において光中説が記載されていることを考えても、当時、光中の注記や説がある程度の評価を得ていたといえるだろう。今後、他の写本を調査していけば、他にも光中注記を持つ写本が発見される可能性は高いといえる。

〔注〕

(1)寛政三年（一七九一）生、天保五年（一八三四）七月八日没。上野国沼田藩士。清水浜臣の門人。著作に『新撰字鏡捷見』『絡石の落葉』『ひらめ石の長歌』などがある。猶、伊藤光中の伝記、及び静嘉堂本と桃園本の関係については、拙稿「伊藤光中の『とりかへばや』研究―桃園本・静嘉堂本を中心として―」（『古代中世国文学』二十　平成十六年一月）にて論じている。

(2) 写本四巻四冊十行本。表紙藍色、紙表紙、本文楮紙。袋綴。二七・五×一八・五㎝。題簽左肩「とりかへはや春（夏・秋・冬）」、首題「とりかへはや一（二・三・四）」。第一冊目のみ表紙右肩に「百十七号忍屋本」と記された貼紙がある。「松井蔵書」「静嘉堂現蔵」印。第一冊冒頭には山岡浚明の序文がある。

(3)写本四巻四冊十行本（第一巻欠、提要・系図・年立が書かれたもの一冊を含む）。表紙薄茶色柿渋刷染（後装）、紙表紙、本文鳥の子。袋綴。二三・七×一六・三㎝。扉題「登理加幣婆也二（三・四）」「登利加幣婆也物語 序 提要 系圖 年立」（原表紙）、首題「登理加幣婆也二（三・四）」。「青谿書屋」「神村長豊蔵書」印他。

(4) 写本。袋綴、四冊。本文楮紙。表紙左肩題簽「取か幣はや物語一」「登りかへはや物語二」「と理かへはや物語三」「取かへはや物語四」　首題「とりかへはや一」「とりかへはや四」（巻二と巻三はなし）、尾題「とりかへはや終」。「皇典講究所圖書印章」「信陽上田成澤蔵書」「國學院大學圖書印」他。

(5) 鈴木弘道氏『浚明本とりかへばや』（むさし書房　昭和四四年）。

(6) 奥書の経緯について注意しておくべきことがある。「文政八年

酉八月以両本校加僻案了」とあるように静嘉堂本最初の校合年次は文政八年八月である。そして、その時、用いた二本の写本のうち一本に國學院大學蔵本と同じく石川雅望までの奥書があったと考えられる。つまり、可能性の一つとして、文政八年八月に静嘉堂本が校合に用いた写本が、文政七年までの奥書がある國學院大學蔵本であり、さらにその校合後の静嘉堂本を國學院大學蔵本書写者が文政八年八月以降に借りて校合をしたのだという写本の貸し借りの可能性が考えられる。また、もう一つの可能性としては、静嘉堂本・國學院本が共に、石川雅望の奥書がある写本を用いて校合したのだとも考えられる。この二つの可能性があるが、静嘉堂本には校合の経緯が事細かに書かれてあるということを考えると、前者の國學院本を用いて静嘉堂本が校合したというのであれば、國學院本の「文政七年～」の行の奥書部分も書写しただろうと思われるから、やはり後者の両本が共通の写本を用いたという可能性の方が高いと考えられよう。

(7) 国文学研究資料館蔵マイクロフィルムで確認。墨及び朱の判別は、片寄正義氏「とりかへばや物語の基礎的研究」(「国語と国文学」昭和十三年五月)による。

(8) 宝暦六年(一七五六)二月十七日生、天保四年(一八三三)九月十一日没。七八歳。墓、紀伊和歌山湊吹上寺。(『国書人名辞典　第四巻』(岩波書店　平成十年)。)

(9) 生没不明。〔名号〕通称、六郎。姓、源。〔経歴〕讃岐山田郡下田井村人。寛政八年(一七九六)、本居宣長に入門。(『名家伝記資料集成』(森繁夫氏　思文閣出版　昭和五十九年)。)

(10) 「松琴」の号を持つ人物は複数存在する。その中、享和三年に読み終えることができるのは、松岡正臣(一七八七～一八六一)と生没年不明とされる大庭氏發である。しかし、山田六郎高村が『とりかへばや』を手に入れた享和三年夏から数ヶ月しか時間が経っていないこと、山田六郎高村と同じく讃岐の出身であるということから、「松琴」は松岡正臣の可能性が高いと思われる。

松岡正臣　天明七年(一七八七)生、文久元年(一八六一)八月五日没。七五歳。讃岐吉原人。眼科医、和漢学に通じ詩歌俳をよくする。(『名家伝記資料集成』(森繁夫氏　思文閣出版　昭和五十九年)。)

(11) 清水宣昭　寛政五年(一七九三)一月二十三日生、明治元年(一八六八)十一月十一日没。七六歳。藤井高尚・本居春庭に国学を学ぶ。(『国書人名辞典　第二巻』(岩波書店　平成七年)。)

〔付記〕資料の閲覧をご許可下さった静嘉堂文庫、東海大学付属図書館、國學院大學に記して厚く御礼申し上げます。

――あらい・かずみ、広島大学大学院博士課程後期在学――